

檜垣

世阿弥作

前

ワキ 岩戸の僧

シテ 里の老女

後

ワキ 前に同じ

シテ 檜垣の姫

地は 肥後

季は 雑

ワキ詞

「是は肥後の国岩戸と申す山に居住の僧にて候。さても此岩戸の觀世音は。靈驗殊勝の御事なれば。暫く参籠し所の致景を見るに。南西は海雲漫々として万古心の内なり。人稀にして慰み多く。致景あつて郷里を去る。誠に住むべき靈地と思ひて。三年が間は居住つかまつて候。

詞

「こゝに又百にも及ぶらんとおぼしき老女。毎日關伽の水を汲みて来り候。今日も来りて候はゞ。い

シテ次第

かなる者ぞと名を尋ねばやと思ひ候。

「影白河の水汲めば。く。月も袂や濡らすらん。

サシ

「それ籠鳥は雲を恋ひ。帰雁は友を忍ぶ。人間もまた是れ同じ。貧家には親知少なく。賤しきには故人疎し。老悴衰へ形もなく。露命きはまつて霜葉に似たり。

下歌

「流るゝ水のあはれ世の。其理を汲みて知る。

上歌

「こゝは所も白河の。く。水さへ深き其罪を。浮

びやすると捨人に。値遇を運ぶ足引の。山下庵に着きにけり。山下庵に着きにけり。

シテ詞

「いつもの如く今日もまた御水あげて参りて候。

ワキ詞

「毎日老女の歩み返すぐも痛はしうこそ候へ。

シテ

「せめてはかやうの事にてこそ。少しの罪をも遁るべけれ。亡からん跡を弔ひ給ひ候へ。明けなば又参り候ふべし。御暇申し候はん。

ワキ

「暫く。御身の名を名乗り給へ。

シテ

「何と名を名乗れと候ふや。

ワキ

「中々の事。

シテ

「是は思ひもよらぬ仰せかな。彼後選集の歌に。年ふれば我黒髪も白河の。

詞

「みつは汲むまで老いにけるかなと。よみしもわらはが歌なり。昔し筑前の太宰府に。庵に檜垣しつらひて住みし白拍子。後には衰へて此白河の辺りに住みしなり。

ワキ「実にさる事を聞きしなり。其白河の庵のあたりを。
藤原の興範通りし時。

シテ「水やあると乞はせ給ひし程に。其水汲みて参らす
るとて。

ワキ「みづはくむとは。

シテ「よみしなり。

地「そもみづはくむと申すは。く。唯白河の水には
なし。老いてかゝめる姿をばみつはぐむと申すな

り。其しるしをも見給はゞ。彼の白河の辺りにて。
我跡とひてたび給へと。夕まぐれして失せにけり。

く。
(中入)

ワキ詞「さては古への檜垣の姫仮に顕はれ。我に言葉をか
はしけるぞや。一つは末世の奇特ぞと。思ひなが
らも尋ね行けば。

歌「不思議や早く日も暮れて。く。河霧深く立ちこ
もる。陰に庵の灯の。ほのかに見ゆる不思議さよ。

く。

後ジテ

「あら有難の弔ひやな。く。風緑野に収つて煙条直し。雲岸頭に定まつて月桂円かなり。朝に紅顔あつて世路に楽しむといへども。

地

「夕べには白骨となつて郊原に朽ちぬ。

シテ

「有為の有様。

地

「無常のまこと。

シテ

「誰か生死の理を論ぜざる。

地

「いつを限る習ひぞや。老少といつば分別なし。変はるを以て期とせり。誰か必滅を期せざらん。誰かは是れを期せざらん。

ワキ

「不思議やな声を聞けば有りつる人なり。同じくは姿を顕はし給ふべし。御跡とひて参らせん。

シテ

「さらば姿を顕はして。御僧の御法を受くべきなり。人にな顕はし給ひそとよ。

ワキ

「中々に人に顕はす事有るまじ。早々姿を見え給へ。

シテ「涙曇りの顔ばせは。それとも見えぬ衰へを。誰白河のみつはぐむ。老の姿ぞ恥かしき。

ワキ「あら痛はしの御有様やな。今も執心の水を汲み。輪廻の姿見え給ふぞや。早々浮び給へ。

シテ「我いにしへは舞女の誉れ世に勝れ。其罪深き故により。今も苦しみを三つ瀬河に。熱鉄の桶を荷なひ。猛火の釣瓶を提げて此水を汲む。其水湯となつて。我身を焼く事隙もなけれども。此程は御僧

の値遇に引かれて。釣瓶はあれども猛火はなし。

ワキ「さらば因果の水を汲み。其執心を振り捨てゝ。とくく浮び給ふべし。

シテ「いでくさらば御僧の為め。此かけ水を汲み乾さば。罪もや浅くなるべきと。

ワキ「思ひも深き小夜衣の。袂の露の玉だすき。

シテ「影白河の月の夜に。

ワキ「底澄む水を。

シテ「いざ汲まん。

地「釣瓶の水に影落ちて。袂を月や上るらん。

地クリ「それ残星の鼎には北溪の水を汲み。後夜の炉には
南嶺の柴を焚く。

シテサシ「それ氷は水より出でゝ水よりも寒く。

地「青き事藍より出でゝ藍より深し。本の憂き身の報
いならば。今の苦しみ去りもせで。

シテ「いや増さりぬる思ひの色。紅の涙に身を焦がす。

クセ「釣瓶の懸縄繰り返し。憂きいにしへも。紅花の春
のあした。紅葉の秋の夕暮も。一日の夢と早なり
ぬ。紅顔の粧ひ。舞女のほまれもいとせめて。さ
も美しき紅顔の。翡翠のかづら花しをれ。桂の眉
も霜降りて。水にうつる面影。老衰かげ沈んで。
緑に見えし黒髪は。土水の藻屑塵芥。変はりける。
身の有様ぞ悲しき。実にや有りし世を。思ひ出づ
ればなつかしや。其白河の波かけし。

シテ「藤原の興範の。」

地「其いにしへの白拍子。今一節と有りしかば。昔の花の袖。今更色も麻衣。短き袖を返し得ぬ。心ぞつらき陸奥の。希婦の細布胸合はず。何とか白拍子。其面影の有るべき。よし／＼それとても。

昔手馴れし舞なれば。舞はでも今は叶ふまじと。

シテ「興範しきりに宣へば。

地「浅ましながら麻の袖。露うち払ひ舞ひ出だす。

シテ「檜垣の女の。」

地「身の果を。」（序の舞）

シテ「水結ぶ。釣瓶の縄の繰り返し。

地「昔に帰れ白河の波。白河の。」

シテ「水のあはれを知る故に。是まで顕はれ出でたるなり。

地「運ぶ蘆田鶴の。根をこそ絶ゆれ浮草の。水は運びて参らする。罪を浮べてたび給へ。く。

底本・・国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈第八輯』大和田建樹 著